

# 自分を書く「大陸の花嫁」

——井筒紀久枝論——

王 璇 静

## 一 問題の所在

一九三〇年代から一九四〇年代前半、日本の侵略政策の一端を担う「開拓移民」の配偶者として、日本国内から満洲に渡った女性たちがいた。彼女たちは「大陸の花嫁」と呼ばれた<sup>1)</sup>。

大陸の花嫁に関わる研究の多くは歴史学や社会学の立場から行われてきた。加納実紀代は「大陸の花嫁」を、「純血大和民族の子孫を殖やす手段」であり、「現地の一ひとびとを日本文化に同化させるための道具」として、「近代日本の矛盾を集約して背負わされ」た存在と指摘した<sup>2)</sup>。松田澄子も女性史の視点から「大陸の花嫁」の役割と戦争被害を明らかにした<sup>3)</sup>。また、古久保さくらは「大陸の花嫁」をめぐる言説を満洲農業移民家族の言説から捉え直し、「最も私的な分野として思われがちな家族をめぐる言説が、国家的一大プロジェクトへの女性達の関与をひきださしめる可能性」を指摘した<sup>4)</sup>。

そのほか、主に社会教育史の視点からの研究である「大陸の花嫁」の養成を議論した『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか』は、

「大陸の花嫁」養成の社会的基盤を解き明かすために、文芸作品にみる「大陸の花嫁」イメージに触れている。本書は、男性作者による男性主人公を描いた文学作品を取り上げることで「美しさをもつ」、満洲で「新たな生活への期待を実現すべき」「希望の星」として「大陸の花嫁」がイメージ化される力学を明らかにした<sup>5)</sup>。ただし、男性の立場から「大陸の花嫁」の表象の意義を明らかにすることに議論の比重が置かれているため、女性主体による「大陸の花嫁」の表象についてはほとんど問題化されていない。

本稿の目的は、「大陸の花嫁」として語られてきた女性自身の語りを明らかにし、その語りが孕む問題を明らかにすることである。そのための具体的な対象として、井筒紀久枝の残したテキストを取り上げる。

一九二二年、福井県に生まれた井筒紀久枝<sup>6)</sup>は一九四三年に渡満する。だが、わずか二年後に終戦を迎え、チチハルの難民収容所での生活を経て、一九四六年に日本に引揚げた。井筒が一九七七年に出版した句集『望郷』（北荘文庫）はこの一連の実体験に基づいて製作された。その後、井筒はNHK学園の文章教室に入門。一九九三年

には自分史作品「生かされて生き万緑の中に老ゆ」（生涯学習研究社）を発表、本作でNHK自分史文学賞大賞を受賞した。さらに井筒は、二〇〇四年に新たな自分史作品「大陸の花嫁」（岩波書店）を発表している。

井筒は俳句と自分史という異なるジャンルで「大陸の花嫁」という独特の立場を綴ったばかりでなく、自分史作品という単一のジャンルで二つの作品を書いている。三作品で異なる語りを明らかにし、井筒の創作の軌跡を明らかにすることで、個人の植民地や戦争の体験の多層性が読み取れるであろう。

## 二 日常の断片——俳句句集『望郷』

井筒は引揚げ後、一九四八年から加藤楸邨の俳句結社「寒雷」に投句を始めている。句集『望郷』はこの投句を元に製作された。二部構成で、第一部には「わが青春を捧げし北満の日々」、第二部には「紙漉きしわが少女時代」という題が付いている。第一部では満洲生活と引揚げ体験が描かれ、第二部では渡満前と引揚げ後の本土の生活が詠われている。

本節では、満洲生活と引揚げ体験を詠んだ第一部「わが青春を捧げし北満の日々」に焦点を当てたい。初出未見の句も含めて取り上げるが、筆者の調査した限り、多くは七〇年代に『寒雷』掲載された句である。よって、第一部の収録句は七〇年代に創作されたものが主であると推察できよう。

西田もつぐも「満洲の結誌社などに農村女性の俳句作品は少な

いと思われ」、井筒の『望郷』に対しても「帰国後の回想作が多いと思われる」と述べている。しかし「当時の生活を的確にリアルに描いて作品の完成度は高く、満洲俳句史の一郭を占める」と高く評価してもいる。西田のいう「当時の生活」とは、井筒が「大陸の花嫁」として経験した農耕生活と推察される。これは当時満洲にいた文化人とは異なる井筒独特の生活である。ただし、西田は「リアル」と評価する俳句表現について具体的な分析を施しているわけではない。であれば、この観点から俳句表現の緻密な分析が必要になる。まずは満洲の光景を描く「開拓地」の章を読み解く。鉤括弧で俳句の初出を記し、確認できない場合は未明とした。

解氷期野原動くや豚生まる（『寒雷』一九七五・五月）

放牧や桔梗芍薬いっせいに（『寒雷』一九七五・二月）

麦熟れて東西北地平線（『寒雷』一九七六・二月）

一句目、春の季語である「解氷期」に「野原」が「動く」という比喩が、「豚生まる」によって具体化している。満洲の春には、活き活きとした生命がそこにあると感じさせ、生命が宿っているという印象をもたらす。そして、三句目は夏の季語「麦熟れて」を用いて、東西南北の地平線に見渡す限り麦畑が広がっている場面からは当時の満洲農業移民が持つ収穫の喜びと希望が感じられる。

特に注目したいのは二句目である。この句では、上五に季語ではない「放牧」が置かれている。中七に二つの季語を詰め込んで、「さきさきよう、しゃくやく」と三音四音で切れているためにリズムと安

定感が確保されている。だが、桔梗と芍薬は季語として属する季節は異なる。イレギュラーな季重なりの使用で、日本内地でありえない満洲において芍薬と桔梗が一斉に咲く光景を詠んでいるのだ。この季重なりは井筒の意図的な表現であろう。<sup>(9)</sup>

この三句のように、井筒は現地開拓民の眼差しから、希望があり生命感あふれる満洲を可視化しようとする。四季の移り変わりに従った春耕秋收の農耕生活、戦争の雰囲気など微塵も感じさせない「農業移民」の人々の日常生活を鮮やかに描くのである。

その一方で、開拓団の人々にとって慣れない異郷の地である満洲で生きることの難しさを詠んだ句もある。

牛連れて曠野は五月種付けに〔寒雷〕一九七五・二月）  
収穫期ランブの下で麵麩捏ねて〔寒雷〕一九七六・二月）

一句目では本土と違う地理環境と満洲での慣れない大陸式農法について、二句目では「ランブの下」で家事をする、電灯のない移民生活の「予期もしていなかったきびし」（二四頁）さが詠われている。前掲のように、開拓民の希望溢れる満洲を表現しつつも、並行して現地生活の不便さと辛さも表現されている、少なくとも戦後井筒が俳句を詠んだ時はその不便さをする気持ちが見える。

続く「満人部落」の章では、井筒の視線は現地の中国人に移る。この章の十二句のうち三句が纏足に言及している。

向日葵やよちよち纏足出ては入り〔寒雷〕一九七六・一月）

纏足のたらたら立ちて西瓜食ふ（初出不明）  
纏足の鶏を集めて日向ぼこ（初出不明）

中国人女性を表すときに「纏足」を用いることは、井筒独特の表現ではないが、彼女の俳句では「出ては入り」や「西瓜食ふ」、「鶏を集めて」などの日常生活のシーンが前景化する。「纏足」女性の日常生活の描写からは、「大陸の花嫁」である井筒が中国人女性へ寄せる関心のありかが読み取れよう。

井筒が「纏足」を表現する時には「よちよち」「たらたら」のように擬態語が用いられる。本来赤ちゃんに用いられる「よちよち」は女性が小さな歩幅で歩くさまを描き、「たらたら」は纏足女性が揺れながら立つ姿を表現している。このような視覚的表現は、満洲での中国人女性の不安定な生活状態をも感じさせる。さらには、「開拓地」の章で日本女性が生き生きと農業をする姿を描くのに対して、纏足女性が労働の担い手にならないことを強調しているともいえ、現地の人々に対する微かな優越感を見ることもできなくはない。

ここまでで取り上げた句は、植民者である日本人の平和な生活を、中国人の生活と併せて描き出した句といえる。だが、中国との戦争の情勢の推移に伴い、日本人は満洲での植民者の優位性を失いはじめ、井筒が敗戦を詠った句には、異民族の中国人や「敵」の姿は登場しない。代わりに描かれるのは、それまでの支配者であった日本人の姿である。「敗戦」の章では戦争の直接的な表現はあまりなく、強調されるのは戦場でもっとも弱く、捨てられやすい子供の存在である。

蚤虱じわじわ餓えて死にし子よ〔寒雷〕一九七四・九月〕

穴掘ってわが子埋めし枯野かな〔寒雷〕一九七二・八月〕

子が死んで枯野は星がきらめけり〔初出不明〕

子が死んで蚤に虱に血を分かつ〔寒雷〕一九七五・一〇月〕

掲句は全て、日本人の子供たちの残酷な戦争体験をまざまざと描いている。「蚤虱じわじわ餓えて死にし子よ」には、現地の食糧不足と、難民になった子供の、不潔で辛酸な敗戦体験が強く表現されている。「子が死んで」から始まる二句は、子供の死を対照的に表現している。一句目は、子供の死を「枯野は星がきらめけり」と抒情的に表現するが、二句目は「蚤に虱に血を分かつ」と即物的に表現する。死んで星となるように願う切なる気持ちと眼前の残酷な光景が並記されることで、子どもを失う体験の複雑さを巧みに表現しているといえよう。

「引揚げ」の章では、「祖国」と「異国」に関わる表現が出現する。

われに祖国敗れても月のぼりくる〔初出不明〕

雁わたる北満南満はよその国〔初出不明〕

大人になってから渡満した井筒には、明らかに「祖国」の意識がある。敗戦によって満洲国の開拓民としての夢は破れたが、敗戦しても「月」は「のぼりくる」。敗戦後の外地に登る、不変の美しさを持つ月を通して、不滅の存在としての「祖国」にすがる姿を見て取れる。敗戦を体験した井筒の脳裏には、ナシヨナリズム概念の「祖

国」の姿が浮上するのである。

二句目では、井筒が「北満南満」を「よその国」と捉え、日本人の植民者での身分を意識していることがわかる。藤村妙子は「大陸の花嫁」が「擬似的な自己実現」や「家族制度からの解放」は他国の民の土地を奪う侵略行為の一端を担っていた」と指摘する<sup>10)</sup>。句集名の『望郷』が示すように、やはりこの時点での井筒の「よその国」に対する認識は、母国への憧れに収束した移民としての「大陸の花嫁」であり、その侵略性などには及んでいない。

### 三 人生を描く——自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』

八〇年代から流行した自分史は、現在の時点で自分の過去を再認識したものと見て、日本独特の表現ジャンルといつてよい。注目すべき近年の自分史研究である釋七月子『自分史』は語る<sup>11)</sup>は、自分史の成立と展開を整理し、満洲引揚げ体験者である鈴木政子の『わたしの赤ちゃん』（学習研究社、二〇〇八）や台湾日本語世代などの自分史作品の分析を行っている。釋の研究の重要性は、自分史というジャンルの核に植民地や戦争体験をどのように語り得るのかという問題を見据えようとする点にある<sup>12)</sup>。

俳句の創作を経た井筒が、最初に自分史の形式で自身の体験を綴った作品である『生かされて生き万緑の中に老ゆ』は、井筒が生まれながら渡満までの子供時代と紙漉きの少女時代、満洲植民生活引揚げ及び帰国後の人生体験が描かれている。

分析に入る前に、井筒の自分史で描かれた人生体験を簡潔にまとめる。一九二一年、井筒は越前和紙の里、福井県に生まれた。母の連れ子である井筒は継父とうまく付き合うことができなかった。貧乏な子供時代を過ごし、小学校卒業と同時に紙漉き工となる。親が決めた結婚相手を好きになれず、「大陸の花嫁」に応募して、一九四三年に渡満、全く知らない人と結婚し、満洲の開拓地で暮らすこととなった。その後、妊娠した井筒の世話をするために、井筒の妹が渡満する。敗戦後、難民となった井筒は乳飲み子を抱えて生活するため、現地の中国人の家で乳母となる。この頃、井筒の妹は開拓団の男と強制的に結婚をさせられている。一九四六年に引揚げられる際、井筒は長女を連れていくことは出来たが、妹は満洲に残すことになった。

自分史「生かされて生き万緑の中に老ゆ」の初章「老いて」は、七十歳になった「私」が母の世話をする話である。そして、戦後の体験を記した終章「生かされて」ではまた母の話に戻る。つまり、作品は明確に現在の時点から過去の出来事を思い出す構図をとる。そもそも自分史を書く行為とは、意識的に過去の自分と距離を作り、過去の自分を検証する行為である。初章から終章までを貫く問いは、「私は誰の子」であるのか、そして「私の来し方」はどのようなものなのかという疑問である。本作は、「大陸の花嫁」であった「自分とは何者か」という問いに対し「私と母」の関係から答えを得ようとするテキストといっても良い。井筒が本作において、どのように自分の体験を再構成するのかを読み取っていく。

「私」は、渡満までの生活では親から愛されず、両親からいつも叱

言を言われていたことを強調する。自分の意志で好きな人と付き合うことも許されないゆえに、「何もかも忘れたくて、当時、女子青年団に奨励されていた「大陸の花嫁」に応募し、満洲（中国東北部）へ行こうと決意した。（四二頁）」と語る。井筒は渡満した自分を「自暴自棄になって行った大陸の花嫁」と認識しているのだが、作品の後半部分には、井筒が自分の人生を意味づける箇所がある。

私は川。どこから落ちてきた一雫が谷川になり、石にぶち当たり岩に打ちのめされ、揉まれ揉まれて紙漉きに使われ、溝川へ流され、崖から突き落とされもしたが、今は周囲から助けられ幸せにゆったり流れている。今は周囲から助けられ幸せにゆったり流れている。が、豊かな流れには、岸边に芥の漂うこともある。

（九五頁）

「川」という比喩的表現を用いて、井筒は様々な遭遇した苦難を受け入れながらも、なんとか生き延び得たことを肯定的に捉えようとしている。「どこから落ちてきた一雫が谷川になり」という表現から、井筒は「自分の来し方」の執拗な問いから解放されていることが読み取れよう。「自暴自棄になって行った大陸の花嫁」から「豊かな流れ」の「川」となる重要なプロセスこそが、満洲から引揚げとその後の体験にほかならない。

井筒は渡満後、妊娠し出産、母となる。「誰からも愛されずに育ててきた私は、わが子は愛しみ育てようと心に決めてい（七二頁）」た。

子供の誕生により、井筒は、自身の立場が愛を求める子供のから子供を愛する母に転換したことを意識した。あるいは、母になることで「母と子」の関係を作り直そうとした自分の姿を捉えようとしているともいえよう。

その上、夫が現地召集された母と子は、敗戦後の厳しい状況に直面する。チチハルの収容所での体験を描く場面では、娘の「清美を銃身で小突き、私に銃口を向けた」八路兵から、自らを犠牲にする覚悟で娘を守る場面が語られる。死と正面から向き合うことは、「母と子」とは何かという問題を新たな次元で考えることになる。

「わが子を生かして、連れて帰りたいかった」「私」は、日本人会が難民となった日本人に斡旋した仕事を引き受ける。「私」は、中国人の家庭「李家」で「敦華」の乳母になった。

李家ではそれを知りながら、私たち母子を優遇してくださったのだった。隣近所の人たちとも笑顔を交わすようになり、安穩な中にいた。(中略〓筆者) 私たちのチチハル引き揚げは昭和二十一年八月二十八日に決まった。

(中略〓筆者)

太々は敦華を抱いて、西門まで見送りに来てくださった。別れの握手を交わした時の太々の手の温もりは、私の生涯、忘れることができない。西門には満州の夕日が赤かった。

(八三頁)

一般的に、敗戦後は日本人が満洲国軍とソ連兵士に襲撃され、掠

奪された出来事が語られることが多い。だが、井筒は引揚げまでの生活において、この「乳母」体験をとりわけ強調する。「私」にあって「乳母」は何かを奪われた側でなく、何かを与える側の存在であり、「乳母」の仕事を通して女性の身体の生産性を積極的に認識しようとするのである。とともに、「李家」での体験の表現により、個人的なレベルで従来の悲惨な引揚げ女性から逸脱な語りが見えるのではないか。

終章では、「私」の出生の秘密が明かされる。「私」の母は若い時に男に強姦され、「私」を産んでいたのだ。「私」は「母そっくりの顔立ち」をしているが、「どこかにその男の面影がある」のかも知れなかった。このため、「私」は母に対して「男を憎み、私をも憎かったに違いない」という「自己嫌悪」の思いを持ち続けることになった(九七〜九八頁)。その後「わが家で私が看取っている母の過去をあばきたくない。しかし、私は敢えてその真実を書き残す(九八頁)」と語る。

この自分史作品で、井筒は自分の生涯を顧みる。真の過去を隠さず、自分の来し方を直視することは、井筒にとって「自己嫌悪」から脱出するための方策だったのではないか。作品の最後には、次の句が置かれている。

生かされていき万緑の中に老ゆ

書名にもなっているこの句の「生かされる」という言葉は、自分の意識や意志と関係なく生を受けることを表現している。自身が望

まれない子供だったことを意識しているのだろうか、そうした境遇を「生き」たという言葉には、自分の意志で主体的に生きなそうとしたことが表現されている。井筒は、自分が主体的に選択した出来事と、そうでない出来事とを織り交ぜながら自分の人生を再構成しているのだが、それは「万緑の中に老ゆ」といった人生の豊かさを意味する表現に収斂されることとなる。この俳句は井筒の自分の人生に対する総括であろう。西田が論じたように、井筒の俳句の多くは「境涯俳句」といえ、「生」に「命を賭ける」という受動的積極性がある<sup>21)</sup>。この「受動的積極性」は自分史作品でも見られる。

満洲生活は内地の生活から逃げるために始まった。何も分からなままの渡満だったが、現地では一生懸命に農耕生活を過ごした。敗戦後は生き抜くために乳母の仕事をし、飢餓と俘虜生活という極限状態を経て、成長した女性となった。この句には、親の愛に飢えるわがままな少女から、子供を守る母になるまでという人生が凝縮されている。「私」が母を介護する局面で始まり、その介護を終えた局面で閉じられる『生かされていき万緑の中に老ゆ』は、井筒が「母と子供」の関係をから自分の来歴を問い直し、自己の再生に至った作品といえるのではないか。

#### 四 時代を描く——書き換えられた『大陸の花嫁』

『生かされて生き万緑の中に老ゆ』を書き上げた井筒は、十年近く経つてのち、もう一本の自分史作品『大陸の花嫁』を書いた。この

部分は『大陸の花嫁』に焦点を絞り、二つの自分史作品を合わせて読んで、『大陸の花嫁』で表現した井筒の体験を考察し、井筒が執筆する時意識の変化をも読み取っていく。

『大陸の花嫁』の「まえがき」には次のような記述がある。

当時、私の「大陸の花嫁」の目から見たものは、日本人の横暴さと「メイファズ（仕方がない）」で諦める中国人のおおらかさであった。

それは、日本国敗戦で逆転した。阿鼻叫喚の満洲から生きて帰ってきた私は、八十歳の今、まだ生かされている。

(三〜四頁)

「日本人の横暴さ」や「メイファズ（仕方がない）」で諦める中国人などの表現が見られ、戦争における自民族と他民族の意識が明らかにする。敗戦体験に関しては『生かされて生き万緑の中に老ゆ』に登場した「死線を越えて」の代わり、「日本国敗戦で逆転した」、「阿鼻叫喚の満洲から生きて帰ってきた」という表現が使われ、ここから、「日本」と「満洲」の対立が読み取れる。

さらに、二つの自分史作品が描く満洲生活には、特に日本人の目線から見た現地の人々に対しての描写に微妙な違いがある。例えば、『生かされて生き万緑の中に老ゆ』では「現地の人たちは、日本人の言うことは少々無理なことでも従い、特に私たち女性を歓迎し、優遇した」(五二頁)と淡々と書かれているが、『大陸の花嫁』では「現地の人たちは、日本人のご機嫌をとり、お追従を使っていた。そ

れに乗じて日本人は彼らに無理難題をふっかけ、横暴を極めた者もいる」(三〇頁)と記述される。ここから『大陸の花嫁』には現地人が受けた暴力の表現が現れ、植民地支配に対する反省の態度も窺える。

また重要なのは、『大陸の花嫁』では緻密な筆致で立体的な女性像が描き出され、植民者内部の葛藤が描き出される点であろう。とりわけ妊娠する「私」を世話するために、渡満した「私の妹」の存在である。『生かされて生き万緑の中に老ゆ』ではあまり表現されなかったが、『大陸の花嫁』においては目立つ存在である。

敗戦後の混乱状態に直面した日本人コミュニティでは、日本人の女たちを守り「敵から狙われ」ることを避けるために「若い男女」に異性装をさせ、偽装夫婦を作った。

私の妹には、「死ぬときは一緒に死のうな」と、交わした人がいた。私は、たとえ偽装にしても、その興亜の人と組ませたかった。だが妹は、警備隊長M氏の息子に見初められていた。それで、世話になっている興亜の立場から、興隆の幹部に従うべきだと、私たち姉妹は説得された。

(七二頁)

妹の体験を表現する時、前述の「偽装夫婦」のエピソードに言及し、女性に対する戦時の性的暴力の問題を顕在化しようとしている。『生かされて生き万緑の中に老ゆ』では、妹の処遇は「警備隊長の松原さんの息子に見始められていたので、私もともに、その家族とい

うことになった(七四頁)」と簡潔にまとめられているだけである。そして、妹とM氏の息子が偽装結婚して作られた家族という共同体についても、「妹のお陰で」あったと曖昧な表現で語られる。

しかし、『大陸の花嫁』では、妹は好きな男性と引き離されて強制的にM氏の息子と「偽装結婚させられた」とはつきりと語られる。

『大陸の花嫁』では戦時における女性の立場の弱さや婚姻制度の欺瞞が強調されているといえよう。

また、先の引用でわかるように、妹の献身的な行為は自分の安全確保のためだけでなく、妹が属する「興亜」開拓団と、彼らの世話をする「興隆」開拓団の関係にも関わり、敗戦後外地にいる日本人の共同体の間の利益交換という要素もある。戦時に大陸の花嫁になる井筒と妹の偽装結婚は、女性の資源化の問題を仄めかす。

このように、結婚という極めて個人的であるべき選択であっても、自分の意思通りにはなからなかったという点で「私」と妹は共通する体験を持つといえるが、『大陸の花嫁』の「私」と妹との体験には差異もある。

「私」が実家から逃げ出すために「大陸の花嫁」に応募したことは、「私」の主體的な選択であった。しかし妹の場合は「私の身を案じた故郷の母は、妹を寄越してくれた(三八頁)」と書いてあるように、そもそも妹の渡満は「私」のためであった。さらに、妹と「私」は一緒に引揚げられなかった。

「妹を返してください」

私はM氏に頼んだ。



「いや、このまま息子の嫁にもろうておく」

(中略＝筆者)

私は、妹を残して引き揚げ列車に乗った。動き出した列車を追いかけてくる妹の姿が見えた。妹は私と一緒に帰りたくて逃げ出してきたが、間に合わなかった。

(九九～一〇二頁)

引揚げ前に「私」はM氏に妹を返すよう頼むが、拒否される。その後「私は、妹を残して引き揚げ列車に乗った」。妹は敗戦国の国民として過酷な体験を強いられたばかりか、女性として日本人コミュニティからも犠牲となることを強いられた。さらには、妹は家族というコミュニティにおける犠牲者でもある。別の言い方をすれば、井筒は『生かされた生き万緑の中に老ゆ』では語らなかった自身の加害者の側面を、『大陸の花嫁』ではあえて語ろうとしているのである。

もう少しこの点を掘り下げたい。妹が現地に残されたのは、引揚げ前に、妹を返して欲しいという「私」の要求をM氏が拒絶したことによるが、直接にはM氏の家族が「天然痘に罹っていたので家族ぐるみ隔離され」たことが原因である。対する「私」は、「係官に、自分の腕章や胸章を示し、彼らとは帰るところが違う、家族ではないことを告げ(一〇〇頁)」ることで引揚げ列車に乗ることができた。

姉であり、母でもある「私」は、妹と子供の間に引き裂かれていた。結果的に、子供を内地に連れて帰るために、妹を満洲に見捨てたのである。前節で論じた『生かされて生き万緑の中に老ゆ』に描

かれた「川」のような自己肯定に容易に収斂できない、ネガティブな自分の側面を捉えようとしている。

次の引用は、引揚げ後、「私」が実家に帰った場面である。

「おっかあ、帰ってきたんや」

私は声を落とし、戸を低く叩いた。

「えっ、すさをかつ。すさをが帰ってきたんかつ」

驚いて起きたらしい母の声に、私は一瞬、私は嫁いだ身、やはりここへ帰るべきではなかったのだ、母は妹の帰りを待っていたのだった、という思いがよぎった。

(一一一頁)

妹「すさを」の帰還を期待していた母にとって、「大陸の花嫁」として渡満した「私」の姿を見ることは、想像の埒外に他ならない。他家の嫁となった人間は、実家には戻らないという発想は当時珍しくもない。だが、ここには政策として「大陸の花嫁」となった女性の引揚げ後の境遇が象徴されているようにも思われる。国策に従って渡満した女性は日本の家族から離れることになるが、敗戦後「開拓民」の夫も現地召集され引き離されることになる。内地に戻っても帰る場所などないのだ。

このように、『大陸の花嫁』では「妹」の問題が前景化され、そこに前述の植民者と被植民者との関係への関心が重なる。偽装結婚を強いられ、現地に残された妹。妹を見捨てて引揚げたが、帰る家を持たなかった「私」。二人の受けた暴力の質は重なりつつも微妙な差

異を孕みつつ、個人、家族、国家という異なるレベルにおける重層的な加害と被害の関係が語られるのである。そこには、「私」一人の問題に留まらない女性の戦争体験一般への問いを見ることのできる。ただし、『大陸の花嫁』は植民地や戦争体験の複雑さを社会的な広がりの中で語ろうとするのと引き換えにして、自分史としての細部のリアリティを損なっている側面もある。それが顕著なのは渡満前の生活の語りである。『生かされて生き万緑の中に老ゆ』では子供時代に井筒の実家の営む「紙漉き」の仕事が廃業したことに言及している。廃業の背景には高価な和紙の需要が低迷した戦前の庶民の生活の一端が垣間見えるのだが、こうした日常の細部に関する記述は、『大陸の花嫁』では後景に退いている。

一方で、『大陸の花嫁』の「引き揚げ港再訪」の章には、『生かされて生き万緑の中に老ゆ』にはなかった以下の記述が存在する。

あれから五十一年経った。私は、引揚船再現の船から春雨煙る佐世保の島々を眺めていた。傍らで母親の遺影を抱いた女性の嗚咽。あの子が生きていたら、五十三歳になる。死んだわが子の幻影が、嗚咽の女性と重なった。過ぎた歳月が脳裏をよぎった。

(一七五頁)

「母親の遺影を抱く女性の嗚咽」に共鳴するようにして、「死んだわが子の幻影」を「私」は見ようとする。自分の過去を思い出す「私」の語りには、他者の戦争体験が溶け込み、融合している。それ

は「私」を越えた「私たち」女性の複雑な経験を語ろうとするものであった。

『生かされて生き万緑の中に老ゆ』から書き換えられた『大陸の花嫁』において、作家の関心はより広い範囲の女性へと移っている。

そして井筒は、自身の体験を個人の問題に留めず、自らを巨大な時代に嵌め込んでいく。一人の人生の表現というより、『大陸の花嫁』であった自分の経験を問い直すことで、戦争の時代における女性たちの集合的体験を描こうとした作品ともいえるだろう。

## 五 おわりに

本稿は、「大陸の花嫁」のジェンダー性と戦争体験の表現という二つの観点から問題領域を設定し、考察を行なった。句集『望郷』は満洲の自然環境や、農耕生活、敗戦後の過酷な体験といった戦争期の日常を見事に描く。自分史『生かされた生き万緑の中に老ゆ』は戦争時代を背景として、紙漉き、出産育児、乳母の仕事などの体験を中心に、「大陸の花嫁」としての個人的な出来事を主体的に書き上げた。『大陸の花嫁』の関心は、自分の身に起こったから広がり、「妹」の存在を前景化させることで、他者との関係で戦争体験を捉え直そうとした。

満洲へ渡った女性たちについて、先行論では敗戦前において「大陸の花嫁」の「産む性」が、大陸侵略の道具に利用された<sup>13</sup>し、敗戦後にそれらが性的被害を受けて、非合法の中絶手術、性の接待といった被害体験と強調した。だが、井筒の表現から敗戦前の穏やか

な農耕生活と「乳母」体験、日本人コミュニティ内部の被害者である妹の存在が見られ、従来の「大陸の花嫁」の姿からずれた存在が浮上するのではないか。

最後に、もう一度「自分を書く」ことに戻ってみたい。書くことによって自分の体験を再生し、再認識する。終戦から七十余年の間、体験者により戦争体験は語り継がれている。戦争を生き残った人たちは、書くことにより、自分の存在を新たに立ち上げ、亡くなった人を甦らせる。歴史の細部にある個人を可視化するためにも、著名な作家の作品にとどまらず、これまで見過ごされてきたテキストを発掘し、その表現が意味するところを考える作業は重要であろう。

## 注

- (1) 渡邊洋子「大陸の花嫁」金子幸子ほか編『日本女性史大辞典』吉川弘文館、二〇〇八、四四九頁。
- (2) 加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地』5 膨張する帝國の人流。岩波書店、一九九三、一九九～二二二頁。
- (3) 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第四五巻、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、二〇一八・三、二一～三五頁。
- (4) 古久保さくら「近代家族」としての満洲農業移民家族…『大陸の花嫁』をめぐる言説から』『女性学研究』5、一九九七、一四～二六頁。
- (5) 相庭和彦、大森直樹、陳錦、中島純、宮田幸枝、渡邊洋子

『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか』明石書店、一九九六、二五八～二六九頁。

(6) 井筒紀久枝の略歴はホームページに載せた内容を参照した。

「平和への祈り…井筒紀久枝『略年譜』」: <https://www.balloon.ne.jp/433room/yakunepu.htm> 最終閲覧 二〇二一・一一・一。

(7) 注(6)に同じ。ただし、筆者が調べた限りでは、『寒雷』に井筒紀久枝の初回の俳句掲載は「雪嶺の光紙質を透かす爪も澄む」(『寒雷』一九五二年四月号、四二頁)である。

(8) 西田もとつぐ『満洲俳句 須臾の光芒』リトルズ、二〇二〇、七七頁。

(9) 金丸精哉編『満洲歳時記』(博文館、一九四三)には桔梗は九月、芍薬は六月の季語とある。しかし、附録の「奉天に於ける植物の開花期」には、桔梗の開花期は四月下旬から九月月上旬までとある。

(10) 藤村妙子「大陸の花嫁」彼女たちはなぜ海を渡ったのか』『アジア現代女性史』第八号、二〇二三、一一一～一二九頁。

(11) 釋七月子『自分史は語る』晃洋書房、二〇二〇。

(12) 注(8)に同じ。八五頁。

(13) 注(3)に同じ。

## 【付記】

「満洲」と「満州」の表記に関して、様々な議論があるが、引用箇所をのぞいて、本稿では便宜的に「満洲」という表記に統一した。

(広島大学大学院教育学研究科博士課程後期)